

杉野要吉著 『中野重治の研究——戦前・戦中篇』

島田 昭 男

中野重治は周知のように戦前・戦後のある時期（それは中野の個人史でいえば活躍期にあたる約二十三年間ということになるが）、共産党員であり、また戦前はプロレタリア文学運動の、戦後は民主主義文学運動の中心的メンバーとして活動してきた。この点（もちろん中野だけに限らぬであろうが）他の一般の文学者とは異なる経歴を持っている。つまり一定の政治綱領と規約を持ち、体制（戦前では国体）変革を目的とする政治組織の主要構成員であり、その運動と密接な関係にあった文学運動の指導部の一員として活動してきたという独自の経歴があり、当然のことながらそこでの文学実践は政治の問題を無視することはできない。具体的には運動展開の個々の状況の中でいわゆる「政治と文学」の問題として表れ、政治革命に対する文学（運動）の役割、機能、方法などが様々なかたちで問われることになる。

したがって中野について論じようとする時、中野における政治——革命の問題は避けて通ることのできない基本課題となる。作品分析に際しての美学的問題も単なる美学個有の問題として処理されることはない。政治——革命の論理、力学のみならず作用の

分析・検討が要求され、それとの対応で美学的検討がはかられることになる。

杉野要吉氏の中野に関する論考は、その意味でいえば中野論の基本課題を押えたりえでそれに関連し派生する問題を系統的に追尋しているといえよう。つまり革命運動及び文学運動における中野の示める位置と役割、とくに革命運動及び文学運動の方針と具体的展開方法に関する中野のその時々の発言、主張、行動を可能な限り明らかにしながら、それとの関連で作品の分析、検討を試みるという方法を取っている。それを杉野氏は中野が「時代のこのした文学業績の価値評価をあたうかぎり実証的・論証的に行つてみ」るといふ言い方で規定しているが、しかし断わるまでもなくこの作業には相当の困難さがつきまとわざるをえない。

その一つはマルクス主義解釈の多様化に伴い革命路線、形態が必ずしも統一されたものにはならなくなっており（これはすでに明らかかなようにスターリン批判以後、中ソ論争をへて国際的になつてきているが）、このことがかつての革命運動史評価にも影響し、党史・革命運動史が完全なかたちでまとめられるにいたっていないという点である。が、これは視点を変えれば個々の研究者にそれぞれのマルクス主義解釈と革命運動についての理論的追求を要請していることにならう。以前のようにある一定の（既製、公認のといつてもよい）解釈・理論に依拠して作品分析を試みることはほとんど不可能になつてきている。研究者の思想なり世界観の再検討が強いられ、真の意味での創造的な思想構築が不可欠な前提となつている。

これとは別な問題を挙げると文献、資料の問題がある。革命運動が非法形態をよぎなくされたのに従い、文学運動も次第に合法面を狭められていき、弾圧との対応関係から秘匿する部分が多くなってきた。このことが現在運動に関する文献・資料（創作メモ・日記・書簡などの個人的資料をも含め）の不足、欠如をもたらし、実証作業を難しくしている。これは中野の場合も同様である。

これらの点で杉野氏の作業は当初からかなりの困難がつきまわっていたといえるが、丹念な事実調査と鋭い作品分析を通して問題を具体的に解明し、中野重治研究の水準を引き上げる結果になっている。本書に対する評価の高さもそこからきているが、幾つか具体例を挙げてみることにしたい。

アナキスト系、文戦系（社会民主主義系）を排除し、党の主導のもとにマルクス主義的方向に運動を再編、統合していった大正末期から昭和初年にかけてのプロレタリア文学運動の中で、中野がその個々の文学的意識、感性をいかにか活かしながら革命的文学者として自立していったのかを問うているのが、第二部「プロレタリア文学運動のながれのなかで」である。ここではまず福本イズムの影響下にあった初期中野の革命詩と詩論の分析から発して、同じく初期の高名な評論「結晶しつつある小市民性」の問題点——労芸との対立、抗争過程で文学（芸術）運動の「特殊性」についての明確な規定を試みることなく、運動を「政治的に押し進め」ていかざるをえなかった弱点を、この時期の中野においては「政治と文学」の問題はありえなかったとする栗原幸夫氏への批

判をも兼ね、細部にわたり究明している。いうまでもなく中野の抱えこんだ弱点は、当時の革命運動の性急なかたちでの組織的展開の反映にはかならず、文学（芸術）論にせよ、組織論にせよ具体的な実践をもとに批判、検討がなされ、それぞれの誤謬ないし欠陥が正され、補われて、次の段階に進むという理論検証の基本的手順が、経験上の未熟さもあって充分でなかったことからきている。つまり中野の場合その理想とする文学（芸術）論が、「生きた実践運動理論」として自身の内に肉化されずにいたことを意味しているが、杉野氏は中野のこうした傾向は「芸術大衆化論争」にも認められると考えている。

「大衆化」に際して文学（芸術）の独自性をどこまで認め、それを現実の運動の中に具体化していくかがこの論争の中心課題であり、「芸術一元主義」の立場を取る中野は文学（芸術）と政治との機能・役割上の明確な腑分けを蔵原に要求していくのだが、しかし運動の急速な展開は論争を「論理的に貫徹するに充分な時間を与えず」、「空疎」「空漠」な意味しか持ちえぬもの」にしてしまった傾きがあるというのである。そしてそれは党への参加が日程にのぼる中で、「文学（芸術）の役目」を労働者、農民に対する党の思想、スローガンへの広範な煽動・宣伝と規定せざるをえぬという状況に立ちいたった時にも同様に現れ、中野の持論との理論的ずれの検討は深められることなく終ったとしている。なお論争中のテキスト誤読への批判は、論争の主題にかかわる問題であるだけに重さを持っている。

つぎの第三部「敗北の底から」では、中野のいわゆる転向五部

作を中心に転向後の人間的・文学的再生への困難きわまる行程を微細に追求している。中野は悪化する内外の状況下で、「革命運動の伝統的革命的批判」という周知の課題を自らに課し、転向文学者の新たな道（中野のいう「人間および作家として第一義の道」）を模索することになるが、杉野氏はこの峻烈な自己格闘を内に含む文学営為——転向五部作の到達点を「汽車の罐焚き」に見ている。これは杉野氏の独自の解釈として注目されてよいであろう。

即ち転向問題の「社会的個人的要因」の「文学的综合」をはかろうとしたのが転向五部作であるが、しかしその意図は中野の思い通りに達せられたとはいいがたく、「第一章」「鈴木・都山・八十島」ではむしろ混迷を強いられ、「村の家」を契機に「新たな文学コースへの突破口」が探られていくという「苦しいたたかい」の末、漸く「汽車の罐焚き」において一応の達成を見るにいたったというわけである。これは転向五部作を「汽車の罐焚き」成立のための前史的作品とする考えである。そしてこの「汽車の罐焚き」については、第四部の「戦時下における芸術的抵抗」で具体的な検討がなされている。

素材的に限られた枠内での運動批判が先細りしていくのを打開するため村の世界に場を移し、主人公を取り囲む生活や人間関係の拡がりの中で転向問題を主軸に自己及び運動への批判を試みたのが「村の家」であり、その試みを生かす方法として「事実を追う」客観的創作方法が採用されていると杉野氏はいう。これは「村の家」の特徴として虚構性を挙げている満田郁夫氏とは異なる見解であり、「村の家」を次の作品へのステップとして捉えよ

うとする考えが基本になっている。つまり「汽車の罐焚き」における作品世界の拡がり、そこでの労働者との「人間的連帯感の回復」、あるいは「客観的叙事詩的」世界の描出などは「村の家」なくしては考えられないとするのである。これは「一つの小さい記録」の考察にあっても同様であり、モチーフはプロレタリア文学運動の再生の基準を問おうとする点にあるとし、そのために運動の崩壊体験が内在批判を伴いながら記録されねばならなかつと解釈する。即ち「汽車の罐焚き」における時代への「ぎりぎりの抵抗意志」と基底にある運動再生への願いとが、すでに準備されつつあったというわけだが、これらの点は今後の作品研究の主要テーマの一つとなろう。

ところで以上紹介してきたように、杉野氏は革命運動・文学運動のそれぞれの時期の問題点と対応させながら中野の人間と文学を「実証的」に検討し、文学史的位置付けをより確かなものにしてきているのだが、もちろんその作業は終了してはいない。そこで継続さるべき作業（事実上はすでに継続されている）への要望、ということになるが、ここではそれを形を変え中野研究の共通の課題として述べることにしたい。

結局、問題は最初に触れた研究上の問題点に戻っていくことになるのかもしれないが、必要なことは諸外国及びわが国の革命運動の総合的な史的検討作業をさらに押し進めることになろう。そしてこれは当然プロレタリア文学運動の総合的な見直しをいっそう徹底化し、その評価を厳正化していく結果になるであろう。

例えばアナキズム文学評価の問題がある。プロレタリア文学運

動の段階でアナキズム文学は組織的に排除され（いわゆるアナ・ボル論争）、評価も否定的であった。このアナキズム文学評価に關しては中野もまた充分でなかつたことを、初期時論を引用しながら杉野氏も指摘しているが、こうしたアナキズム文学への対し方の底には革命運動の國際的レベルでの政治的決定・処置が強く作用していた。つまりアナキストの場合、革命への敵対者として処置（当該國の政治情勢如何によつては肅清）され、その文学（芸術）も全否定されるにいたつたのだが（その当否はむしろ客觀的に問われねばならない）、これとは別な運動内部の問題にしても、國際的レベルでの政治的決定・処置は組織内で強い拘束力を持つていた。ことに革命運動が多くの國々に波及、統一的指導が必要になるにつれ、指導は官僚的システムによつて系統化され拘束力を強めていくことになつた。わが國の革命運動・文学運動においてもそれは例外ではなく、黨のテーゼを始め個々の方針決定にまで拘束力は及ぶようになつた。

そこで問題は運動の主要位置にいた中野がそうした國際的レベルでの決定・処置にどのように對していつたかであるが、それを検討する材料はやはり運動展開の支柱となつた文学（芸術）論と組織論の二つにならう。

前者についていえば國際的レベルで公認された文学（芸術）論に對して自己本来の文学（芸術）意識・感性をいかに生かしきり、独自の文学世界（當時の用語で階級芸術）を創出したかという問題になる。この點に關しては以前木村幸雄氏が「國際的マルクス主義芸術論に從つて論理化された芸術意識」と「日本の伝統と

彼（中野）個人の資質に深く結びついた芸術意識」との具體的關係を分析したことがあり（中野重治の芸術觀について」昭41）、また杉野氏も前に紹介した「芸術大衆化論争」考察の中で、蔵原惟人の「國際『芸術運動』路線」からする提言と中野との主張との食い違いに觸れ、個に根ざした中野の文学（芸術）認識の独自性を強調しているが、まだ充分に問題が究明されつくしているとはいへない。『斎藤茂吉ノオト』の「短歌写生の說」などの検討をも含め、個々の作品分析を通しての問題解明が重要な課題とならう。

後者では國際的レベルで討議、決定された組織論、運動論のわが國における具體的の問題が検討対象になるであらう。問題は多方面にわたり複雑であるが、例えば中野が党フラクションの一員として討議に参加したコップ（日本プロレタリア文化連盟）結成の問題である。プロフィンテルン第五回大會の決定に從つて文化運動の統一的中央組織として結成されたコップについては、中野が「一つの小さい記録」でその組織過程での問題点を描き、杉野氏も運動組織の基本的性格と在り方をめぐつて検討を加えている。また最近では當事者の一人であつた宮本頭治が自身の「文芸評論選集」第一巻「あとがき」（昭55）で、「國際組織の文獻の絶對化という國際的にも避けがたかつた大問題」の一つとしてコップ問題に言及しているが、その運動史的位置だけは定まるにはいっていない。党中央にいたスバイ松村（飯塚盈延）が背後にいて重ねられていつた党フラク會議の討議内容に關しては生江健次の「予審問調査」（『運動史研究』（3）昭54）によつてある程度ま

で明らかにされているが、正確な実態は不明のままである。中野が「コップ問題を調べて明らかにすることは彼（生江）を弔うことにもつながるにちがいない。」（『わが生涯と文学』昭54）とあえて、書かざるをえなかったごとく、問題は重要であるが、同時に入り組んだ事情のもとに置かれてもいる。周到な事実調査による検討作業が今後も引き続き行われていくことが必要であらう。

なお紙数の都合で簡単な指摘にとどめざるをえないが、「雨の降る品川駅」「鉄の話」などで杉野氏も主要テーマとしている天皇制の問題がある。前の二作品に引き続き「村の家」、さらに戦

後の「五勺の酒」へと接続していくこの天皇制の問題については、私自身も前に小論にまとめたことがあるが（『プロレタリア文学覚え書——『天皇制』の問題をめぐって』昭54）、まさに国際的レベルでの政治的決定にかかわる問題として、各時期の党テーゼ、方針と作品との関係が厳密に検討し直されねばならぬであらう。これによって先の二つの問題の本質的究明がさらに深まることは確かである。

（昭54・6 笠間書院刊 A5判 六五六頁 一三〇〇〇円）

新刊紹介

紅野敏郎編

『近松秋江研究』

近松秋江を「金無垢の私小説家」と呼んだのは、いうまでもなく平野謙であったが、このわが国独特の私小説形式の代表的作家に対して、没後四十年に近く、完全な全集はもとより、独立した研究書もまだ刊行されていなかった。そうした中であって

本書は、「主として早稲田大学の大学院におけるゼミのなから生み出された」「近松秋江に関する最初の研究書」（あとがき）である。その意味では、平野謙の尽力によって文学全集として初めて一人一巻の扱いをうけた、集英社版『近松秋江集』を、本書は想起させるであらう。

内容はおおむね三部で、第一部は竹盛天雄・中島国彦・紅野敏郎の各氏による秋江論、第二部はゼミの発表と討論から生まれた「疑惑」を中心とする作品論と作家論九

篇、それに詳細な作品年表と書目一覧が附されている。ゼミの熱気あふれる議論の中から、それぞれが自分の秋江像を手さぐりしていく様子がうかがえるところに、若い人々の新しい視点や発想は、立ちおくらぬ秋江研究を疑いなく刺激するであろう。労作である作品年表・書目一覧とともに、全集刊行の気運をさらに促すものであると思う。（昭55・8 学習研究社 A6判 三八一頁 五五〇〇円）